

2011 7 あけぼの

私たちのライフスタイルは?—3・11以後……

特集 自然と共生する知恵、自然からいただきエネルギー鎌仲ひとみ×吉岡 忍
いま、この時代にいのちの大切さを考える大石芳野
東北に百パーセントの自然エネルギー導入プランを飯田哲也

連載 “ことばの杜”への小道 Part II / 子どもたちの「はてな」が成長への道 お相手・大林知子氏／山根基世
ミステリアスな日々 / 精神(こころ)のエネルギーを高めて木崎さと子
活憲とヒューマンライツ(人権) / 原発から自然エネルギーへ向かう欧洲伊藤千尋
光と風のおくりもの / 「カラス来襲」三浦暁子
キリストの足跡 / 聖霊の恵み百瀬文晃





大林知子

おばやし・ともこ

滋賀県草津市立草津第二小学校教諭。



ことばの杜への小道

Part II

第7回



山根基世

やまね・もとよ

NHK退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。



子どもたちの「はてな」が成長への道

大林 昨日の授業で子どもたちが、言葉の「どんどん」「どんどん」「ふうふう」「ぶうぶう」はどういうことで盛り上がったんだです。足音だとか、「これは何だろう」ということに注目したので、今日は「好き」か「嫌い」かで、子どもたちなりに好きや嫌いの気持ちをどう表そうとするのか。それを子どもたちから引っ張り出して、彼ら自身が楽しめたら、と思いました。

山根 タンパリンを使うのはどういうことから

子どもたちの問い合わせ出発

山根 担任されている一年生の国語の授業を見事！という感じで見せていただきましたが、先生ご自身が楽しんでいらっしゃるふうにも見えました。一年生を担任なさるのは何歳目ですか？

大林 久しぶりで……八年ぶりくらいで、四回目です。これまで大きい学年を持つことが多かつたので戸惑うところもあります。四月十一日が入学式です。

山根 今日は五月の十日ですから、入学してまだ一か月にもならない。

大林 連休もありましたし、学校に来るのも一十日もたっていません。

山根 それなのに五時間目という時間に、飽きずに最後まで先生についていつてましたよね。「今日は雨ですよ」から始まりましたが、授業を組み立てるときに、どういうことをお考えになりましたか？ まず、雨が好きな人と雨が嫌いな人とに分けて……。

ですか？

大林 リズムに乗ることを楽しめるようにタン
パリンやウッド木製の打楽器プロックを準備しています。

山根 言葉を体で覚えるようなことを考えて
らっしゃるのでしょうか。

大林 学年で違うと思いますが、一年生は言う
ときに必ず体が一緒に動きます。今日の授業でも
体が動いていたと思いますが、授業が始まる前に
子どもたちが、雨、雨、嫌い、と言つていました
が、そのときも体が動いていました。

山根 教室全体が生き生きして空気が活発に動
いていて生きた空間という感じがしました。雨が
嫌いなのはなぜかな？ という「はてな」に、
(たぬきなどに)毛が生えてるから、と。(笑い)
大林 最初びっくりしても、よくよく聞いてみ
ると、なるほどなと思うことがありますね。

山根 先生は、子どもたちの言葉を否定するよ
うなことは決しておつしいませんね。

大林 どの学年でも、自分の考えがしっかりと言
えて、そのことで友達から反応が返ってくること
が大事ではないかと思っているので、私の言葉で
否定して、彼らがもう言わないでおこう、と思う
のが一番心配なんです。もちろんストップしない
といけないこともありますが、自分の考えたこと
を話してくれるときは、一旦全部受け止めよ
うと思っています。

山根 幼いときに大人から自分の言つたことを
否定されたら、もう次から言いたくない、となり
ますよね。否定しないのは幼い子を教育するとき
大事なことかもしれませんね。

大林 学習集団としてある程度の秩序、ルール

も必要ですし、何でもかんでも言つていいという
状況にすると、学習が成立しなくなる、というこ
とも心配です。でも、型にはめてお行儀よく、形
ばかりを整えるようにしていると、見た目は整然
としているかも知れないけれども、子どもたちは
自分の言葉でしゃべっていないのでないのか。そ
れがすごく気になりますので、秩序を守りつつ、
でも自分の言いたいことが言える教室を作りたい
と思っています。

山根 最後に、ひらがなで黒板に「さ」という
字をお書きになつたら、全員がすっと立ち上がり
て踊り始めて。(笑い) 手拍子に合わせて言葉を
どんどん出していましたよね。なにか秘密の工夫
があるのでですか。

大林 いえいえ。ひらがなを一日一文字、学ば
ないといけないので、ああいうバターンで。

山根 一ヶ月の間に身についた振る舞い方が出
来上がっているんですね。

大林 はい！ と手を挙げて話せない子も、「さ」
のつくものはなんでしょう、と言つとぱつ
ぱつと言えます。全員が一日のうちで一度でも皆
の前で話す場を作りたいと思っています。

山根 先生はどの子にも、ちゃんと自分の言葉
で話す、ということを大事に考えてらっしゃるよ
うですが、それはどういうところから？

大林 子どもが自分の言葉で話していないと、
ほんとうのその子の学習にならない、ということ
があつて。それが「はてなの授業」にもつながつ
ていくのですが。

山根 「はてなの授業」は非常に工夫をこらさ
れた授業でしたが、どういうところから発想な
さつなんですか。

大林 子どもが自分の学習をしていないことに
子どもたちの正面、教壇にいるとすごく感じます。
子どもたちはやらなくてはならないからやつてい
ますが、学習が楽しいとは思つていません。

山根 失礼ですが、教職は何年目でいらっしゃ
いますか、今。

大林 二十年目です。

山根 すると十九年間教師として見てきて、こ
の子たちは楽しんで勉強をしていないと。

大林 なんとかしたいと思つても、毎日忙しく
次の授業の準備をするだけで精一杯で大きく変え
ることができない。それで四年前、大学院に研修
に行く機会をいただいて、本を読んだり、自分の
授業を振り返つて考えたりする時間ができ、その
ときに行き着いたのが「問い合わせ」でした。授業では、
子どもが自分の問い合わせではなく、教師であ
るこちらが立てた問い合わせに子どもたちが食いついて
くることを狙つっていました。でも子どもたちが自
分の言葉で話すのは、自分の中で聞いてみたいこ
と、こうじやないかと伝えたいことで、そのよう
な子ども自身の何かを動かすようなものができれば、
学力もしっかりと身に付いていくのではないか
と考えました。

山根 ふだんは教師のほうから生徒に問い合わせ
る。

大林 それが主ですね。私の問い合わせに子ども
たちが乗つて、一生懸命意欲的に学習するときも

ありますが、でも子どもたちの問いは、子どもの中から出でこないといけない。

山根

朝日新聞の取材記事「花まる先生」に載つていた例で言うと「こんぎつね」で、なぜ兵十がいきなり撃つたのか、とか、いろんな疑問を子どもたち自身が出ってきて、それに対しても友達同士で答えたり、クラス全体で考えたり、という授業を組み立てられていましたね。

大林 自分がます物語を読んで、納得がいかないことを問い合わせ……子どもたちには分かりやすく「はてな」という言葉を使っていますが、はてなを自分の中に作つて、そのはてなについて考えていく。その考えを友達に伝えてみる。自分の考えを持ち、友達に問い合わせ、考え方聞く。それを何回か繰り返すうちにストンと納得したと思つたらそれで終了。意見を聞くうちに余計分からなくなってきたら、そのはてなをクラス全体のはてなにして皆で考えます。例えば、この物語で最後に話し合つたのは、一番悪いのはだれなのか、といふはてなでした。

山根 そういう授業は、先生が発問する授業とどう違いますか。

大林 家族や友達と対話が生まれることが多い



ですね。家で自分のはてなをお母さん聞く。母親と考えが違つても、そのまま持つてくる。授業が終わつてからも友達と話し合う。そういう会話を子どもがしあつたら、それは今日の授業に少し

意味があつたと思えるパロメーターです。そういう確率は、子どもたちが考える自分のはてなから

のほうが高いですね。

山根 子どもはどんなふうに変わりますか。

大林 子どもの自信をつけいくように思いますが、皆は少し違うかもしれないけれども、自分はこう思つ、次もやっぱり考えてみよう、と。そして友達の会話を聞こう、聞いてみたい、この人はどう思つているのだろう、という集団の雰囲気ができていく気がします。

山根 だれもが発言しやすい、居心地のいいクラスを作る一つの手がかりにもなつていてよいですね。

大林 それは間違いなくあると思います。集団としての居心地のよさ。一人一人を大事にして意見を聞ける。

自分の考えをもつて語りあう

山根 ほかに詩人の時間やお話担当や、いろいろな話をする工夫をしてらつしやいますね。

大林 話す心地よさ、皆に聞いてもらう心地よさを味わわせたいですね。四年生ぐらいになると、私も聞く人、あなた話す人みたいな役割ができるがちです。そうではなくて、どの子にもチャンスをあげたいし、皆が聞いてくれた、そういう体験をさせたいと思います。

せたいと思います。

山根 成熟した民主主義を築き上げる原点を育ててもらつしやる感じがして、非常に共感を覚えます。

大林 私は関西人なので、そこにはお笑いも必要だと思って。(笑い) 子どもは自分の話で皆が笑ってくれるのはすごく嬉しいんですよ。これは関東の人には分からぬかもしませんが。だから詩を書いたり話したりするのも、自分の失敗や

小さいときの笑つてしまつ話を紹介します。

山根 失敗を恐れずに、皆の前で話せる。

大林 うまく話せないとか、もうちょっとこう言つたらよかつたなどか、そういうことを繰り返して学んでいきます。初めて「はてなの授業」をして子どもたちに課題を考えさせたとき、自分なら絶対こんなのしない、と思うようなことがあります。

山根 こんな発問、私はしないわ、と。

大林 例えば「てぶくろを賣いに」。大学院に通いながら三年生の担任をしていたのですが、これまで子どもたちのはてなをする、と覚悟をきめて金を持っていていたのか。(笑い) どうやつてこぎつねの手を人間の手に変えたのか。そんなはてな、私なら絶対に出さないです。考えても分かりっこないと思いますよね。でも、そのとき、いや私はこれでやると決めたから、これは子どもに任せる、と思って、これが分からん、と言つたことは、全部授業にしました。そしたら子どもたちは文章

山根 これぞクリエイティブな授業ですね。

こっちの都合で、そんな質問だめよ、この問い合わせしない、とやると成立しない授業で。

大林 子どもたちが、これはなんば考へても分からんわ、と言つて、そやな、と言えばそれはそのまま子どもたちの納得です。すべてを子どもに委ねる前に『モチモチの木』で授業をしました



の中から証拠を出してくるんです。詳しくは忘れましたが、お金は魔法で出したんぢやないか、町に行つて自動販売機の返却口から持つてきitanじやないか。(笑)

山根 (笑い) よく考えますね。

大林 手がかりはその文章しかない、と言つて、文章の中から本当に探してくるんですよ。

山根 検事か弁護士みたいですね。

大林 (笑い) 私が今までこんなのは分かりつこないと思つて捨てていた問いは、子どもたちが自分たちで見つけようとするものなんだ、と気づかされました。

山根 子どもから教えられる感じですね。

大林 毎日目からうろこ状態で、その代わり何が出てくるか分からぬから、授業を考えるときにはどう準備していくかも分からぬ。(笑い) ただ、ただ、私も文章を何回も何回も読んで、こんなふうに考えられるかな、あんなふうに考へるかな、と子どもと同じレベルなんです。子どもたちが考えてきて、でも、先生、これをこう見つけたんやから、どう? と話せることがすぐ面白かったですね。

が最初に出たはてなが、豆太のお母さんはどうしたのか、でした。私はまだ中途半端な気持ちで、子どもたちから問い合わせを出させたけれども、学習できこうな問い合わせを選んで与えました。お母さんはどうしたのか、は分からんと思つて外しました。学習が全部終わつた後に子どもたちの感想を読むと、またそれが書いてあつた。(笑い) 子どもたちは納得しない。私の与えた問い合わせを考えてはいたけれども、心の中ではそれがずっと気になつて残つていた。それから覚悟を決めました。

山根 先生としても教える側の覚悟を決めるまでに時間がかかるんですね。

大林 かかりますし、今でも搖れます。ほんとうに学習としてできるのかなど。でも、子どもたちの本気になれば学習にならない「はてな」はない、と思いますし、本気にさせるのは子どもの中にそれがあるかないか。気になつてしまがないものになつていてるかどうか、ですね。

山根 大学院を経て「はてな」をなさつてご自身も変わられたものがありますか?

大林 こっちが変に細工して授業を作つて、うまくやつたような気持ちになつても、子どもたちには何も残つていないんだなと。(笑い)

山根 結局は子どもに寄り添うこと。

大林 子どもを通した思いを引っ張り出せるかどうかですね。本気になつて家人と喧嘩してきたとか、あるんですよ。意見が対立して……どう変わってほしいですか。

山根 家族とでも友達とでも語り合える力がついてくるわけですね。対話が子どもたちを変える……どう変わってほしいですか。

大林 自分はこれでいいんだな、人と違うけれども自分の考え方でいい、そういう思いを持つてくれるといいですね。学年が大きくなると、自分がなくて人のことばかり気にしてしんどい思いをしている子がいます。そくならないためにも、自分の思いをしっかりと伝える体験が必要だと思います。失敗しても、自分の思いと考えを持つ人間。そういう子どもに育つてほしいですね。

山根 私一人が言つてもむだよ、私の言つてなんか世の中になんの影響もしないわ、と最初からもの言つことをあきらめる子どもや大人が多いですね。だから世の中が動かない。いいことはいい、悪いことは悪い、ときちつと建設的な意見として社会に発言できる子どもを育てていかないがぎり、世の中百年たつても変わらない。先生、ぜひ、ものの言える子を育ててください。

大林 なんとか自分も成長していきたいと思つていますが……。今はまだ子どもたちが自分を出してきたところなので、まずはそれを全部受け止めて。それからどうしたらいいか一年生なりに子どもたちにぶつけてみようと思っています。一年生から積み上げていくことが大事で、小さいころからの積み上げはすごく大きいと思いますから。